慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米津先生の生きざま
Sub Title	
Author	宮島, 司(Miyajima, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.10 (2011. 10) ,p.128- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 米津昭子先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20111028-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米津先生の生きざま

われわれの敬愛する米津昭子先生が突然亡くなられてしまった。数年前より体調を崩されることがあったが、まさかあの元気いっぱいの米津先生がわれわれの面前からおられなくなるとは思いもよらないことであった。40年近く前からそばにあって、先生が弱音をはかれたり、また体の調子が悪いなどの言葉をお聞きしたことがなかったため、本当に信じられず驚きの一言である。ただ、若い時から健康診断に行かれることがお嫌いで、「私は健康診断になんかは行かないの。なにか分かって、なんとか制限なんかされてまで生きていくことはいやだから」とおっしゃっていたことを思い出すと、このような亡くなりかたもまた先生の生きかたのまっとうであったと考えるしかないのであろう。

先生との出会いは、大学四年の卒業時、当時米津ゼミに在籍していた私の親友が、大学院に進学し研究者を目指そうとしていた私のため、先生に引き合わせてくれたときに遡る。その時以来、直接の弟子筋でもない私を、先生は直弟子のように、また時として本当の母親のように可愛がってくださった。たまたま先生と私の母親が昭和二年生まれであったということもあり、よく「息子ほどの年なのに、あんたよく私にそんなこと言うわね」などと冗談まじりにおっしゃられていたことが印象に残っている。もちろん、そうした一言で目上の者に対する接し方を暗にお教えくださったのであろうが、先生らしいはっきりとした表現の仕方でありながら慈愛に満ちた女性らしさも兼ね備えておられたのだと思う。

先生のそのようなすべてを包み込むお人柄は、学部においても重要な緩衝材のような役割を果たされていた。私の仲間内では、米津先生が女性でなければ学部長に最もふさわしかったのに残念だ、などとよく話していたものである。あの気風のよさ、細かいことにこだわらないおおらかさ、誰に対してもわけへだてのない接し方、どこをとっても上に立つ者の器を備えておられていたからである。ただ、あの時代、この学部において女性が学部長になるなどということはまず考えられなかったことから、時代が悪かったといえばその通りであろうけれど、

その代わり、当時の学部長を陰でささえながら学部の運営をなされていた姿も印象的である。個人的にもずいぶん先生の陰の力にすがることがあったし、何人もの仲間が先生に助けられてきたことも知っている。仲間を愛する気持ち、あるいは他者を慮る態度はなかなかできるようで難しい。

先生の生きて来られかたの素晴らしさは、おそらく「一期一会」に尽きると考えている。世田谷のお宅に伺えば、夜遅くまで、米津ゼミのＯＢ達や訪問客が絶えることがない。いつ伺っても必ずだれかが訪ねてきており、いつ原稿を書かれているのか分からないくらい夜までお忙しいのが先生であった。よく目にした光景は、ゼミ出身ではないがとにかく学生時代先生に救われて今日があると言い、毎年毎年お礼に訪ねてこられる名だたる会社の重役達の姿であった。おそらく、ただただ厳しく成績をつけることだけが大学人の使命であると考えるのではなく、ときには救うことこそが大学教育の根源であるとの考え方の下、人と人との出会い・人とふれあうことこそが先生にとっては第一義と考えておられていたのであろう。私には到底先生の生きざまをまねすることはできないが、先生の姿を頭に浮かべながら学生と接することだけは心がけるようにしている。

そのような先生の生きかたは商法学会においても貴重な存在観を示されることとなる。先生は、戦前戦後を通じて、女性としての第一号の商法学者であった。そのこともあってか、われわれからすれば、雲の上の存在ともいえる鈴木竹雄先生、大隅健一郎先生、田中誠二先生という商法の三巨頭からもずいぶんと可愛がられたとお聞きしている（二〇代の写真を拝見したことがあるが、大変な美女である）。もちろん女性商法学者であることだけでそのように可愛がられるほど学問の世界は甘いものではない。先生は、まさに西本辰之助・津田利治両先生以来の慶應商法学の伝統の上で米津商法学を打ち立てられ貫いてこられたからこそ、学者として認められたことは当然のこととして、それに加えての人柄があったからに他ならないのである。そして、慶應の商法学が学会の中で確固たる地位を占めることとなったのには、われわれ現役商法陣の師匠筋にあたる米津先生を含めた先生方の学問的な貢献によるところがきわめて大きいとはいえ、米津先生の学会におけるそのような人脈が寄与するとこ

ろもかなりあったものと考えている。

われわれ後進は、先生のそのような貢献に感謝しながら、先生の大学人としての生きかたを見習い、また先生が築き上げてくださった慶應商法学をさらに発展させて行くことによって学恩に報いるしかない。

法学部教授　宮　島　　司

生涯の恩師—米津昭子先生

私は大学三年生の時に先生のゼミに入れていただいて以来、約三〇年間、途切れることなくご指導をいただいてきた。先生は、私が研究者として一歩を踏み出す時に背中を押してくださった先輩であり、いつもどんな時でも声を荒らげることなく優しく諭してくださる私のよき理解者だった。ご逝去から一年が経つ機会に、研究者としての先生、教師としての先生、そして仕事を持つ女性の先駆者としての先生について、思い出すままに書いてみたいと思う。

ご業績の詳細については、後掲の「主要業績リスト」を参照していただきたいが、研究者としての先生は、常に問題に真っ向から取り組み真摯に論じられており、謙虚な研究態度は、どの業績の中にも表れている。直観により結論を導くのではなく、判例や学説などに対してもあくまで客観的な分析を積み上げ、慎重に言葉を選び結論を導かれていることは、慶應商法学を担われた研究者